

新年あけましておめでとうございます

昨年中は、多大なるご支援とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。厳しい情勢の中でも、皆様の温かいお力添えに支えられ、私たちは歩みを進めることができました。本年も引き続き、皆様との信頼と連携を大切にしながら、より一層の努力を重ねてまいります。

現在、私たちの組織は看護師7名、作業療法士2名、相談支援専門員4名（うち1名は兼務）の体制で運営しております。この体制の下、それぞれの専門性を活かし、利用者お一人おひとりの状況に応じた丁寧な支援を心がけております。さらに、スタッフ間の密な連携を図りながら、組織全体として質の高いサービス提供に努めてまいります。本年も、一人ひとりが希望を持ち、地域で安心して暮らせる社会を目指し、邁進してまいります。皆様の温かいご支援とご指導を心よりお願い申し上げます。

星相談員が年末年始にスタッフのLINEスタンプを作成してくれました。
今後、販売予定です！



コーヒー中毒
なぞす

ある読者からのお便り（シリーズ2「Who cares?」）第2回

“Who cares?” これはBのための言葉であるのと同時に、Aの自問自答でもあるかもしれない。

Aは自分について問われたのに対し自己否定に近い言葉で答えた。「誰も気にしない(些細なことだ)」の「誰も」は、実はA自身を指しているのではないだろうか。AがA自身を気にしない限り、Aを気にかけるべき「誰か」は直接には現れてこない。気にかける、ケアすることはこの現れない「誰か」にはならないこと、“I DO”の“I”として確かにそこに現れることだろう。“Who ~?”という質問に応答することがケアなのである。

直接には現れてこない「誰か」は常に隠れて現れている。矛盾しているようだが、隠れてというのを背景になって、という表現にしてみたらどうだろう。我々が特定の誰かを相手にするとき(それは自分自身であっても)、常にその背景には無数の他者がいて、その人との関係における評価や判断にはそれらの他者が大いに影響する。

常にすでに、隠れてここに存在する「地」と、〈私〉がそれについて志向する「図」の関係性、この図/地関係を現象学ではゲシュタルト(Gestalt(独): 形態、総和)と呼ぶ。

ルビンの壺という絵をご存知だろうか。黒地に白で縦長の盃か壺のような図形が描かれている。壺は曲線的なくびれのある形をしていて、やけにデコボコしている。だがこの絵の「全体」をなんとなく眺めると、壺以外の部分が二つの向き合った横顔にも見えてくる。黒地に白の壺から、白地に黒の人物へと見えるものが変わってしまうのである。人間の目の錯覚を利用した不思議な絵である。

地を絵の背景だとすれば図は絵のメインテーマとなるような部分である。そう、図は部分に過ぎない。地はその部分に隠れて存在しつつ図を形成するというかたちでそこに現れている。ルビンの壺は図だろうか、地だろうか。壺も横顔も部分に過ぎず、それ(が何に見えるか)を支えるのは地なのである。

「それが何に見えるか」が絵の図/地関係であれば、「誰が誰であるか」が他者の図/地関係といえるだろう。他者を図として捉える〈私〉は、〈私〉の生きる世界を支える地として常にすでに隠れてはたらいっている。だがその〈私〉を形作ってきたのは今までの経験であり、他者そのものである。

(3へ続く)